

### 第3章．ケーススタディ調査報告

#### 1．北海道室蘭市

#### 「鉄のまち」のものづくりまちなか再生推進調査

#### (1) 調査発案の背景となる地域の現状や課題

##### 調査地区の概要

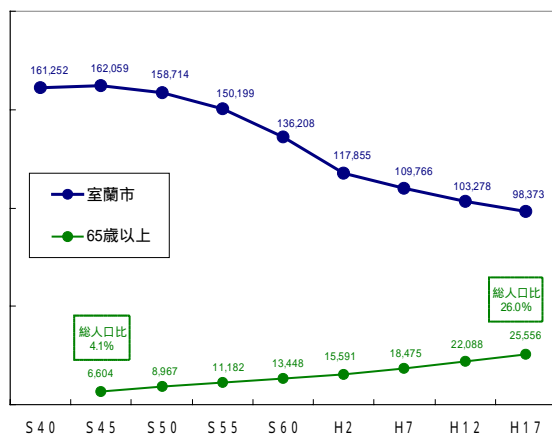
室蘭市は、北海道の南西部に位置し、鉄鋼、石油等の重厚長大産業が集積する北海道を代表する工業都市である（室蘭市の名称は、アイヌ語の「モ・ルエラニ」（小さな坂道の下りたところ）に由来する）。

人口は、昭和44年7月末の183,605人（住民基本台帳）をピークに、基幹産業の合理化、地価が安かった周辺地域への人口流出、近年では少子高齢化の進行もあり、平成17年国勢調査では58年ぶりに10万人を割り込んだ。

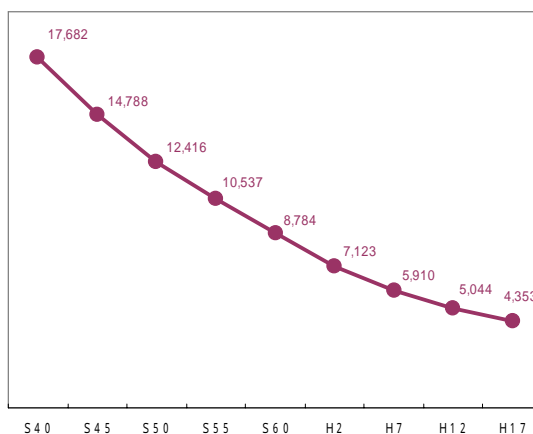


また、今回の調査地区とした輪西地区は、新日本製鐵の工場に隣接する位置にあり、かつては社宅街があり商店街は活気にあふれていたが、昭和50年以後、鉄鋼関連企業の合理化とともに、人口の流出、商業機能の流出が続き、商店街、地区の空洞化が進行している。

図表 3-1．室蘭市の人口と高齢者数の推移(人)



図表 3-2．輪西地区の人口の推移(人)



##### 調査地区における地域経済活動や雇用状況に関する実態

近年、中国の経済成長や鉄鋼需要の高まりなどの影響もあり、室蘭地域における産業は、鉄鋼・石油等の基幹産業を中心に好調である。室蘭市の平成17年の製造品出荷額は8,064億円と過去最高額を記録し、2年連続で北海道第1位になるなど、北海道のものづくり産業を支えている。

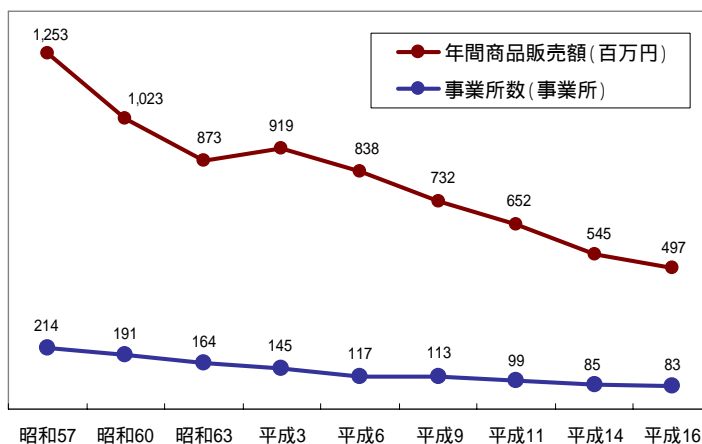
また、基幹産業の好調、工場のフル操業状態を受け、室蘭地域における有効求人倍率

は0.82と、全国平均の1.10を下回るものの、北海道平均の0.53を上回っている（平成18年12月）。

しかしながら、輪西地区の商店街においては、周辺地区でのショッピングセンターの開設により商店や消費者の流出が進行するとともに、地域の少子化・高齢化の影響もあり、空洞化が顕著になっている。

今後、地域の一層の高齢化が予想される中、地域の日常生活を支える商店街が失われることが危惧される。

図表 3-3 . 輪西地区の小売業事業所数・年間商品販売額



### 地域の雇用創出に向けた課題と地域活性化のテーマ

輪西地区においては、空き店舗や空き地の増加、人口の減少により空洞化が進行している。

しかし、その一方で、室蘭市市民会館と複合型商業施設「ぷらっとてついち」が併設された地域の中核施設が存在し、福祉・子育て・まちづくりの分野で活動する複数のNPO法人、まちづくり団体など、地域づくり・まちづくりが活発な地域でもある。



現在の輪西町商店街（平成18年9月）

近年は、商店街の「輪西青年経営研究会」のメンバーを中心に、地域の特徴でもある「鉄」を活かした地域おこしが取組まれており、その活動の中から生まれたボルト人形「ボルタ」は全国的な人気を得て、その生産のための雇用を地域に生むに至っている。

このような、地域資源を活かした活発な取組を、商店街を中心に、大学の「知」と人材を活用しながら展開することにより、商店街での新たな機能や事業（雇用）の創出、賑わいの創出による「まちなか再生」につなげる。

## (2) 地域活性化のテーマに関連する取組の現状

### 官や民の取組の現状

#### 【官の取組】

室蘭市では、商工会議所や各商店街振興組合等が、市内での購買拡大を図るべく取組んでいる「バイ（買）地域運動」を支援し、商業の活性化を目指している。

また、新たに「まちづくり活動支援補助金」を創設し、市民の自主的なまちづくり活動を支援している（輪西地区で開催される「アイアンフェスタ」（「鉄」をテーマにしたイベント）に対しても平成 17 年・平成 18 年に助成している）。

一方、空洞化が進む商店街に対しては、まちの新たな機能と賑わいの創出による「まちなか再生」の検討に着手している。

#### 【民の取組】

輪西地区では、商店街の二代目経営者による「輪西青年経営研究会」が結成され（昭和 37 年）歩行者天国の運営や、輪西神社「裸みこし」の企画開催等の取組が行われていた。平成 11 年には「輪西町活性化協議会」が組織され、室蘭市市民会館（写真中左）と商業施設「ぷらっとてついち」（写真中右）が併設された地域の中核施設建設につながっており、その後の市民会館の運営も地区の NPO 法人が運営している。また、地区では、社宅跡地などを活用したまちづくり計画も検討している。



近年、青年経営研究会のメンバーを中心に、地域の特徴である「鉄」を活かした地域おこしの取組として「てつのまちぷるじえくと」が発足し、アイアンフェスタの開催やボルタの製造・販売、鉄の創作活動やものづくり体験ができる「工房」計画等が進められている。

### 地域活性化のテーマを解決すべく大学等の既往研究・人材等の現状

輪西地区の「てつのまちぷるじえくと」と連携する室蘭工業大学建設システム工学科真境名（まじきな）研究室では、以下の研究活動が行われている。

#### 「鉄」をモチーフにしたアート・デザインのあり方に関する研究

鉄を用いた製品づくり、鉄に関連する若手芸術作家をサポートする仕組みづくりについて研究が行われている。

#### 「アート」を活用したまちづくりに関する研究

アートやクラフトを活かしたまちづくりを研究。平成 16 年からは、輪西地区の「てつのまちぷるじえくと」に参画しながら共同研究を実施している。

#### 「ボルタ」人形のデザイン開発

ボルトを使った人形「ボルタ」のデザイン・開発を行うとともに、地域商品としての販売の仕組みづくりについても研究している。なお、「ボルタ」の生産・販売は「てつのまちぷるじえくと」が行っている。

### (3) 調査の目的と調査内容

#### 調査の目的

本調査では、輪西地区の商店街を核とした、大学と地域との連携による、時代にあった人にやさしい賑わいのある“「鉄のまち」のものづくり・まちなか再生”に向けた、新たな機能や事業を創出する方策・仕組みについて調査する。

#### 調査の内容及び方法

##### ア) 商店街における空き店舗の現況調査

地区の商店街においては、空き店舗や空き地の増加等により空洞化が進行しており、既存ストックを活用した空洞化の抑止策が求められている。しかし、土地・建物の複雑な権利関係や様々な規制、改修費用・ランニングコスト等の課題もあり、空き店舗の積極的な活用が行われていないのが現状である。

調査では、輪西地区における空き店舗の現状を把握するとともに、商店街の協力の下、実際にモデルとなる空き店舗を選定し、「工房」として試験的に使うことにより、実際の活用にあたっての課題の抽出と解決策の検討を行う。

##### イ) 作品の製作と販売の仕組みづくり

地域の特徴である「鉄」を活かした作品を商品化することで、具体的な経済効果、雇用効果が生まれ、また、地域の知名度の向上、住民の地域への愛着を高めることにもなる。

しかしながら、地域商品の開発・販売には、マーケティングの視点が不可欠である。

そこで、アートやクラフトを活かしたまちづくりの先進地の事例調査を行うとともに、輪西地区で生産・販売されている「ボルタ」を例に、生産、雇用等の運営実態や販路に関する調査を行い、継続的・発展的な地域商品の開発・展開の可能性と雇用の創出効果について検証する。

##### ウ) まちなかの賑わい創出に向けたニーズの調査

地域の特徴である「鉄」を題材としたアートやクラフトによるまちづくりにおいては、単に作品の制作・販売ではなく、市民との交流による賑わいづくり、観光への波及による事業の広がりも求められる。

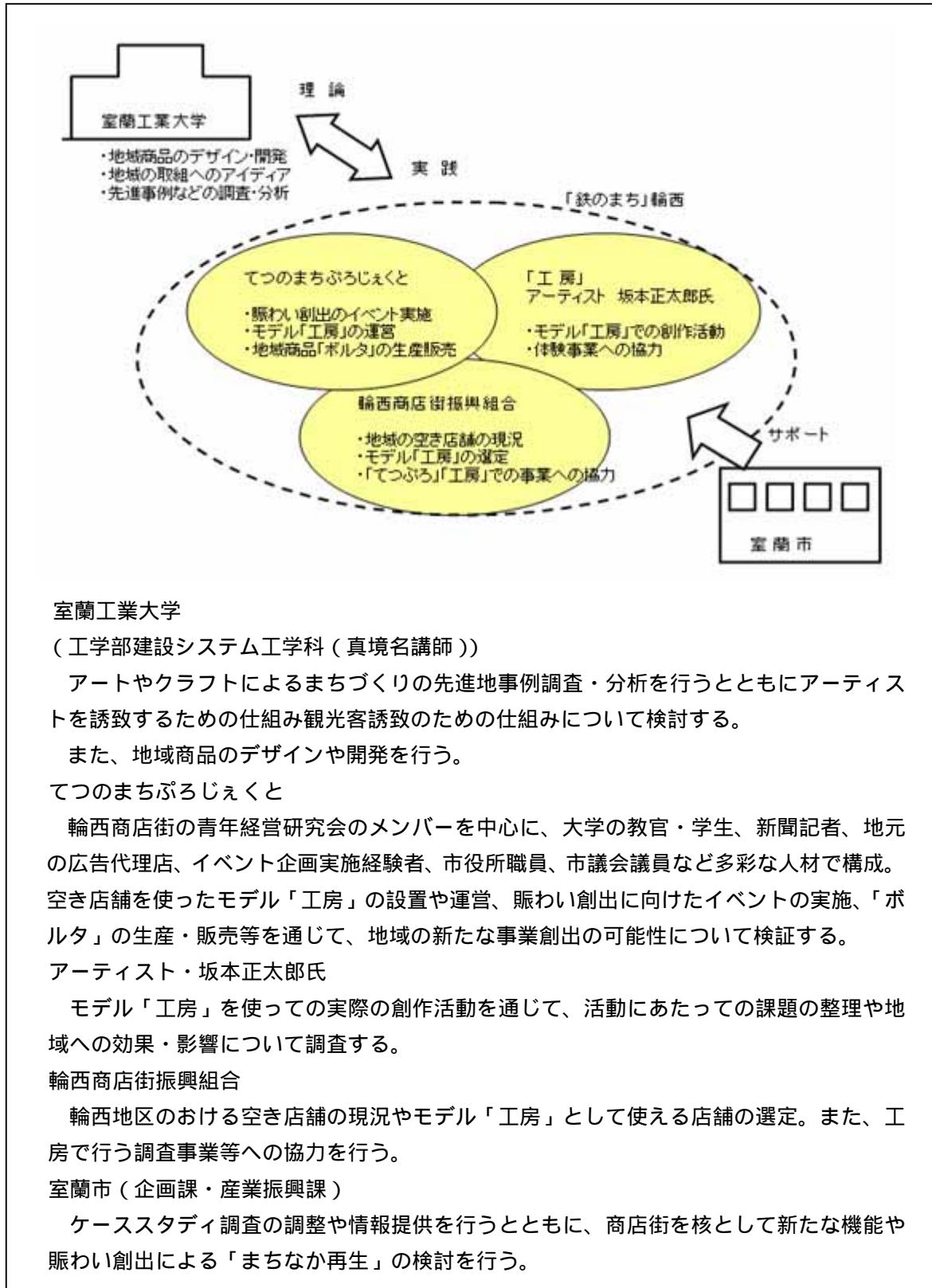
そこで、商店街を中心とした賑わい創出につながる新たな事業の可能性を検討するため、市民、観光客などを対象に、溶接体験・金属加工体験をはじめとするものづくり体験事業のニーズ調査を行う。

##### エ) クラフト職人等の誘致に関する可能性の検証

多彩なアーティスト、クラフトマンが地域で活動することは、作品の多様化、話題性が生まれ、地域イメージ向上につながる。しかしながら、地方都市には短期滞在のアーティストは居ても、定住型のアーティスト、クラフトマンは数少ない。このことは、情報、人的交流等の創作環境や収入などの経済環境が影響していると考えられる。

調査では、北海道内在住のアーティストやクラフトマン等を対象にアンケートを行い、創作活動にあたって必要な環境や、移住・定住における課題を整理し、誘致に向けた可能性を検討する。

### 調査実施の体制と役割



#### 室蘭工業大学

(工学部建設システム工学科(真境名講師))

アートやクラフトによるまちづくりの先進地事例調査・分析を行うとともにアーティストを誘致するための仕組み観光客誘致のための仕組みについて検討する。

また、地域商品のデザインや開発を行う。

#### てつのまちふるじえくと

輪西商店街の青年経営研究会のメンバーを中心に、大学の教官・学生、新聞記者、地元の広告代理店、イベント企画実施経験者、市役所職員、市議会議員など多彩な人材で構成。空き店舗を使ったモデル「工房」の設置や運営、販わい創出に向けたイベントの実施、「ボルタ」の生産・販売等を通じて、地域の新たな事業創出の可能性について検証する。

#### アーティスト・坂本正太郎氏

モデル「工房」を使つての実際の創作活動を通じて、活動にあつての課題の整理や地域への効果・影響について調査する。

#### 輪西商店街振興組合

輪西地区における空き店舗の現況やモデル「工房」として使える店舗の選定。また、工房で行う調査事業等への協力を行う。

#### 室蘭市(企画課・産業振興課)

ケーススタディ調査の調整や情報提供を行うとともに、商店街を核として新たな機能や販わい創出による「まちなか再生」の検討を行う。

#### (4) 調査概要と結果

##### 商店街における空き店舗の現況調査

##### ア) 室蘭市輪西町商店街現況調査

商店街は店舗と一般住宅が混在するなかにあって、全 269 店舗の約 18%、47 店舗が空き店舗であり、そのうち 28 店舗が西側エリア(1丁目)国道側のゾーンに集中していることが把握できた。



現状では活用可能な状態の空き店舗が少なく、解体が進んでいること、土地、建物それぞれの所有者が不明なものが多いことも明らかになった。

次に建築物の活用規制等に関しては、騒音・振動・臭気・排気について、近隣の住民からの苦情があれば、関係法令に則っているか否かに関わらず、改善指導がなされることが指摘された。(しかしながら、輪西地区において40年間、板金店を営んでいる(有)丸弘田中板金店さんの話では「これまで近所から苦情が来たことは一度もない」との事例もあった。)

##### イ) 空き店舗活用における課題

空き店舗の工房活用においては、建物の防火・防災、騒音・振動等の対策と住民の事前理解を得ることが重要である。

権利関係が不明な物件が多いため、使用条件、建物機能等の条件を予め明確にした上で、輪西商店街振興組合(以下、「輪西商店街」)等の地域団体・住民の協力を得て、候補物件の選定・検討を行う必要がある。

## ウ) モデル工房の選定

選定にあたっては、前述のイ、ウ)の課題を踏まえて空き店舗(倉庫)を選定し、モデル「工房」として開設した。

また、輪西商店街の協力により、短期間に開設することができたとともに、町会や周辺住民への周知・理解を得ることもできた。



(モデル工房として選定された川原家具店の空き倉庫(右側緑のシャッターが下りている建物)

空き店舗の選定と活用においては、商店街をはじめ、地域団体・住民の参加と理解を得る仕組みをつくることが重要である。

## 作品の制作と販売の仕組みづくり

### ア) アート・クラフトによるまちづくり事例調査

東京都墨田区：木造空家を活用したアート展、社会実験、シンポジウムなど約 50 のコンテンツで形成される「向島博覧会」を開催。(写真上：京島地区で開発された商品(鉄ピン)、下：空き家改修事例)



岐阜県美濃市：「あかりアート展」「アーティスト・イン・レジデンス」など、美濃紙の産地という特徴を活かし、アーティストと市民の交流を中心とする「美濃・紙の芸術村」事業を展開。

香川県直島町：企業との連携による多様なアートプロジェクトを展開し、観光産業を活性化。(写真上：アートサイト直島改修済事務所、下：草間彌生作野外アート)



北海道洞爺湖町：夏季集中・短期交流型の解消を目的に、国際彫刻ビエンナーレを開催し、洞爺村(現洞爺湖町)を国内外に PR。



### イ) アート・クラフトによるまちづくりにおける課題

東京都墨田区：アーティストをモダンアートに限定したため十分な住民理解が得られなかった。

また、商品単価が高く、販路計画も不十分なため受注に結びつかなかった。

運営主体に住民が参画していなかったため継続展開が困難になった。

岐阜県美濃市：市民交流を喚起する活動により、交流人口が増加。助成金・支援金がなくなった場合の事業展開が課題。

香川県直島町：一定の経済効果があればモダンアートでも展開が可能な事例。

北海道洞爺湖町：国からの事業補助が終了した後の運営資金の確保。

アートによるまちづくりには、住民の参加と交流が必要不可欠である。  
また、スタート当初から、自立した事業としての計画性を持つことも重要である。

## ウ) 商品開発・販売事例調査

### ボルタ

ボルトやナット、ワッシャーをハンダ付けした高さ5～6cmほどの人形『ムロランワニシのボルトマン』の愛称。

市民団体「てつのまちぷろじえくと」のオリジナル・キャラクター商品。

ドラムをたたくボルタ、サクスを吹くボルタなど、平成19年1月末現在で65種類のボルタがあり、毎月1日に5種の新しいデザインを発表している。



### 開発コスト

販売価格は1体500円。人件費175円、販売費100円、材料費75円程度、包装費・柔印刷費等の雑費50円程度で原価400円。利益100円は、新デザインの開発・試作費や「てつのまちぷろじえくと」の運営費に充当している。

### マーケティング

平成17年12月より市内イベント会場での小規模販売を通じて、テストマーケティングを実施。市場ニーズを確認した上で、「てつのまちぷろじえくと」の認知度向上と安定した販売実績の獲得のために「知名度・公共性のある市内施設」と、大量販売が見込める近隣の「温泉観光施設」、「イベント」、「ホームページ」による月間1,000体の販売を計画した。

平成18年4月より輪西の商業施設「ぷらっとてついち」や道の駅「みたら」にて委託販売を開始。原材料を「てつのまちぷろじえくと」が外部より仕入れて、NPO法人室蘭さわやか会の運営する障害者授産施設に供給し生産を委託（1,000体単位で発注）。デザインの開発・試作（月5体）を室蘭工業大学が行い、「月間1,000体の生産体制」、「月間5デザイン開発」の機能シェアリング組織を作り上げた。

不良品は「てつのまちぷろじえくと」納品時にチェックして製造者に返品。買い取り方式の販売により、在庫および原料ロスの発生を防いでいる。

### チャネル開発

ボルタの当初の販売チャネルは、「ぷらっとてついち」の他、室蘭の観光土産品としてイベント会場や道の駅「みたら」である。現在は、フェリーターミナルや市役所売店などの市内6ヶ所と新千歳空港売店、郵便局でもふるさと小包として扱っている。

郵便局（ふるさと小包）でのセット販売は、観光客が少ない冬季の販売対策と回転が鈍い商品の整理を目的としていたが、結果として、全国規模での大量販売に結びついた。



## 雇用創出効果

当初は月 1,000 体のローカル商品だった「ボルタ」であるが、新聞記事や口コミ等でまずは市内に人気を広まり、販売と同時に売り切れの状態が続いた。

その後、全国紙やテレビ、インターネット等でも取り上げられ、さらなる需要が見込めたこと、販路拡大の計画があったことから、平成 18 年 7 月より、輪西地区に「ボルタ工場」を開設し、11 人を雇い、月 4,000 体の生産体制を整えた。

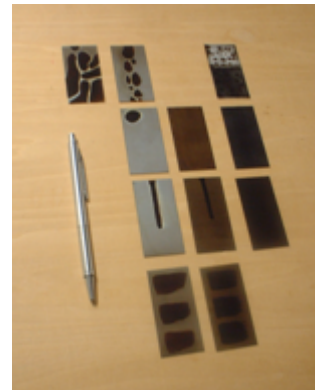
## その他

「ボルタ」のデザイン開発は 100 デザインで終了となる（平成 19 年 1 月末現在 65 デザイン）。ボルタ人気を活用した関連新製品として、ポストカード（販売価格 100 円・原価 18 円）の販売、室蘭工業大学による新しい鉄のクラフト製品のデザイン開発が進められている。

## クラフト試作品例



室蘭の文化である鉄に螺旋-SPIRAL-の形を取り込んだペンスタンド。  
デザイン：彫刻家・国松希根太  
制作：てつのまちぷろじえくと



写真上：鉄をいかした棗  
写真左：ペーパーウェイト

ボルタの商品開発においては、デザイン開発とチャンネル開発を継続的に実施していることが、販売拡大に結びついているが、現状で 6 ヶ所にとどまっている販売チャンネルの更なる拡大と、100 デザイン開発後の販売、新たなクラフト製品の開発に向けた、販売・製作体制の確立が必要とされている。

本格的販売に向けた生産体制の整備と販路の拡大というマーケティングだけでなく、経理、顧客等の管理機能や法人格を持った組織づくり等のマネジメント機能の整備と開発にも取り組むことが必要である。

## まちなかの賑わい創出に向けたニーズ調査

### ア) イベント参加者のニーズ

溶接体験・金属加工体験などのものづくり体験事業に対するニーズを検証した。「アイアンフェスタ 2006」で行われたアンケート結果によると、体験イベントの中で、最も関心度が高いのは「溶接体験」と「スズ鋳物教室」であった。関心を持っている者の中で、実際に体験した者の割合は、「スズ鋳物教室」が最も高く、次いで「溶接体験」であった。特に、「スズ鋳物教室」は小中学生、「溶接体験」は主婦の体験が多かった。



また、体験者の満足度は、どのイベントも高く、溶接、鍛造、鋳物のいずれについても、一度でも体験することで、ものづくりの楽しさと魅力に目覚めるきっかけになると考えられる。

体験型の施設は「有料でも利用したい」が48%と最も多く、1回あたりの利用料金は、大人500円、小中学生250円という回答が最も多かった。

クラフト・ショップについては、「利用してみたい」(68%)が最も多く、次いで「ぜひ利用したい」(16%)であり、職業別では、会社員が最も多く(25%)、主婦、その他職業で90%を超えている。

### イ) 一般市民のニーズ

室蘭市内一般住民100人を対象としたアンケート調査でも、51%が体験教室に興味を持ち、31%が実際に体験をしたいとしている。体験教室への興味は、輪西地区以外の地域に住んでいる市民の方が高い。

親子での体験希望が多く、1回1時間以内・1,000円以内がほぼ80%である。

また、アンケートでは、「鉄とアートを結びつけること」や、「体験教室はまちづくりに効果的だ」とする市民は、いずれも60%を超えており、体験教室には市内全域でのニーズが見込め、かつ、まちづくりの一環としての評価も得られると考えられる。

### ウ) 観光客のニーズ

登別温泉やカルルス温泉のホテル6施設を対象とした、観光客向けイベントとしての体験教室ニーズは、長期宿泊者、修学旅行生向けの通年観光サービスとして評価されている。1回1時間以内・1,000円以内でボルト、ペンダント作りを希望する回答が多かった。

実施方法としては、登別温泉の大規模ホテルでは出張での開催が求められたが、長期宿泊客が多いカルルス温泉では、産業観光(工場施設などの見学)とセットの場合も含めて、輪西での新しい観光体験として魅力的に受けとめられている等、地域・施設によりそのニーズが異なっている。

## エ) モデル「工房」を使った賑わい創出の検証

今回の調査では、実際にモデル「工房」を使って、アーティストによる創作活動や溶接などのものづくり体験事業を行った。

創作活動を通じてつくられた「鉄」の看板やオブジェを活用して、地域の魅力を向上させるには、商店街での作品の積極的な活用など地域との連携・協力が不可欠である。商店街からは、店内での小物の活用やアーティスト・工房をPRするためのパンフレット作成・設置など、具体的な協力・提案もなされた。

また、溶接体験事業については、「てつのまちぶろじえくと」や商店街の方の協力のもと実施することができたが、1人あたりの体験時間が長く、また大人数の体験にあたっては、人手の確保や体験コンテンツ・実施方法の工夫が必要である。

地域の賑わいを創出するモデル工房でのものづくり体験



関心客を固定客化する仕組みづくりが必要である。また、クラフト作品のアイテムの充実と団体客への対応を可能にするために、退職技術者などを活用する人手対策と同時に低料金・高回転事業としての事業計画の策定と受け入れ体制の整備も課題である。

## クラフト職人等の誘致に関する可能性の検証

### ア) 北海道在住アーティスト・クラフトマンの誘致の可能性

北海道在住アーティスト・クラフトマンに対して、地方都市への移住のニーズとモチベーションを把握するために、郵送アンケートを実施した。

その結果、自然環境が豊か(67%)、音を出せる環境(33%)という条件で、41%の芸術家が地方都市への移住を考慮するとしており、芸術家の多くは、周辺環境の良さを条件にあげていることがわかった。

特に自然など、良好な周辺環境を居住地選択の条件とする芸術家の57%は彫刻家であった。



イ) 北海道在住アーティスト・クラフトマンの誘致の検証

今回の調査では、モデル店舗を活用した「工房」において、札幌市から室蘭市に移住された「鉄」のアーティスト坂本正太郎氏に創作活動を行ってもらい検証を行った。

その結果、創作活動については、アーティストやクラフト職人それぞれに応じた機器・設備が必要になるとともに、家賃負担や収入の確保など、地域で継続的に活動してもらうための資金面での課題がある。

彫刻家を中心としたアーティストへの作品展、イベント参加や工房活用物件の案内等の恒常的な働きかけと情報発信が必要である。

また、誘致した後も継続的に地域で創作活動を行ってもらうため、家賃負担の軽減や作品のPR・活用などといった活動を支援する仕組みも必要である。

**坂本 正太郎 氏**

室蘭生まれ。市内の高校を卒業後、北海道教育大学札幌校芸術文化課程に進学。卒業後は札幌市内の自動車製造会社に勤務しながら創作活動を行う。平成18年5月に会社を退職し、12月から輪西地区のモデル「工房」で活動を行う。平成15年には札幌市で、平成18年には室蘭市とニューヨークで個展を開催する。

室蘭市と市民芸術をやった程度。部活も団体としてのまろろじサッカー部でした。ただ、まくとが、輪西町の家におもちゃの楽器を自分で具店倉庫に鉄の加工体験作ったり、絵を描いたりや創作を行う工房を設置するのは好きでした。大した。二〇〇七年度内の学で美術を専門にやれる本格オーブを自指して、課程に進み、そこで鉄と準備が進み、街なか活性化という素材にも興味を持つ化などへの期待がかかようになりました。

——卒業後は札幌で工房に創作拠点を移した室蘭出身の彫刻家、坂本正太郎さん。その言葉、社との接点になり、創作と分の技術でかかわりたい、故郷への思いや創作の熱意があらわれる。室蘭での個展開催を機に、道外へ行くつもりでしたが、高校までは授業で美関は大好きなまま、室蘭は大好きなまま、でも、札幌から

## 鉄にこだわり 触れてぬくもり感じて

体験工房で活動を始めた彫刻家 坂本 正太郎さん



街なか活性化担う

「あなただって鉄を愛する感覚を味わってほしいです。室蘭のまちを、自分の小さいころ比べても、さびわいが減りました。でも、まちを元気にしたいと意欲を持ってた人がたくさんいます。その人たちが力を合せて、自分の活動を『鉄のまち』PRやまちの活性化につなげてほしいです。」

——加工作業の準備も進んでいますね。「市民や観光客に工房に来てもらい、熱した鉄を曲げる作業や簡単な溶接を通して、鉄が形を愛する感覚を味わってほしいです。室蘭のまちを、自分の小さいころ比べても、さびわいが減りました。でも、まちを元気にしたいと意欲を持ってた人がたくさんいます。その人たちが力を合せて、自分の活動を『鉄のまち』PRやまちの活性化につなげてほしいです。」

## (5) 地域の知の拠点活用による地域雇用創出に向けた道筋

### 大学の研究等を活用した地域雇用創出に向けた道筋

今回のケーススタディ調査では、室蘭輪西地区における若手商業者「輪西青年経営研究会」(以下、「青年研究会」)を中心とした「てつのまちぷろじえくと」の取組に注目し、「てつのまちぷろじえくと」を核とした商店街、室蘭工業大学の取組、連携について調査した。

以下、青年研究会での「鉄」をテーマとした地域おこしの構想発案から、ボルト人形「ボルタ」の開発生産、そして「工房」を核とした地域の賑わい創出計画までの道筋を報告する。

#### STEP 1: 基礎づくりのステージ

商店街の2代目経営者を中心とした青年研究会が結成され、歩行者天国の運営や輪西神社「裸みこし」の企画実施など、地域おこしの基礎がつけられた。

青年研究会の中で、「鉄」をテーマとした地域おこしの構想発案。実現に向けて室蘭市や北海道(胆振支庁)、室蘭工業大学などに相談する。

北海道の補助金を活用し「アイアンフェスタ」を企画・開催(平成16年)。当年、室蘭工業大学において「第5回たたらサミット」の開催予定もあり、輪西地区において同時開催することとなる。

この際、アイアンフェスタ実行委員会(てつのまちぷろじえくと)には、青年研究会のメンバーを中心にマスコミ関係者、広告代理店、行政、そして大学の教官・学生等様々な職業の人材が集まった。



#### STEP 2: 開発のステージ

室蘭工業大学建設システム工学科 真境名研究室にて、学生によるボルト人形「ボルタ」が発案。アイアンフェスタにて、ボルト人形溶接体験として実施され、好評を受ける。



#### STEP 3: テストマーケティングのステージ

「アイアンフェスタ2005」をはじめ、市内イベント会場で小規模販売を開始。デザインの開発・試作は室蘭工業大学で、制作・販売は「てつのまちぷろじえくと」で行う。

アイアンフェスタやイベントを通じて、「ボルタ」がPRされていく。

#### STEP 4: 本格販売のステージ

平成18年4月、「ぷらっとてついち」「道の駅みたら」の市内2ヶ所で常設販売。生産を市内2ヶ所の授産施設に委託し、月1,000体の生産体制で開始。しかし、販売直後に売り切れの状態が続き、7月には輪西地区の空き店舗を使って「ボルタ工場」を開設、11名のパートを雇い、月4,000体の生産体制になる(現在は市内6ヶ所で販売)。



#### STEP 5：販路拡大のステージ

市内イベント(室蘭ジャズクルーズ)で特別5体セット販売を実施(ジャズ5体セット)、また、郵便局「ふるさと小包」によるセット販売発送などにより全国発信(11月)。新聞、テレビ、インターネットなどマスメディアによる情報発信効果もあり、注文が相次ぐ。12月には新千歳空港のお土産コーナーでも販売。



郵便局宣伝用ポスター (A3)

ポストカード



ポルタ



ポルタ

#### STEP 6：「鉄」をテーマとした地域おこし(今後の取組)

- ・ 「工房」を使った作家による創作活動や新商品の開発・販売。
- ・ 作家が創作した看板やオブジェを商店街に設置するなど、街並みの景観創出。
- ・ 「工房」でのものづくり体験教室を核とした、観光・教育コースの構築と体験客等の誘致。

調査対象とした「てつのまちぶろじえくと」の取組と大学との連携については、地域のニーズと大学に蓄積されたシーズが最初から一致したわけではなく、地域が企画した「アイアンフェスタ」が多様な人材が集まるきっかけとなり、ひとつのイベント実施に向け全員で取組んだ中から、それぞれが課題を探り、専門性を活かした役割を担っている。

「ポルタ」の開発についても、大学でそれまで研究してきたものではなく、学生が輪西地区での取組の中からニーズを探り出し、開発したものである。

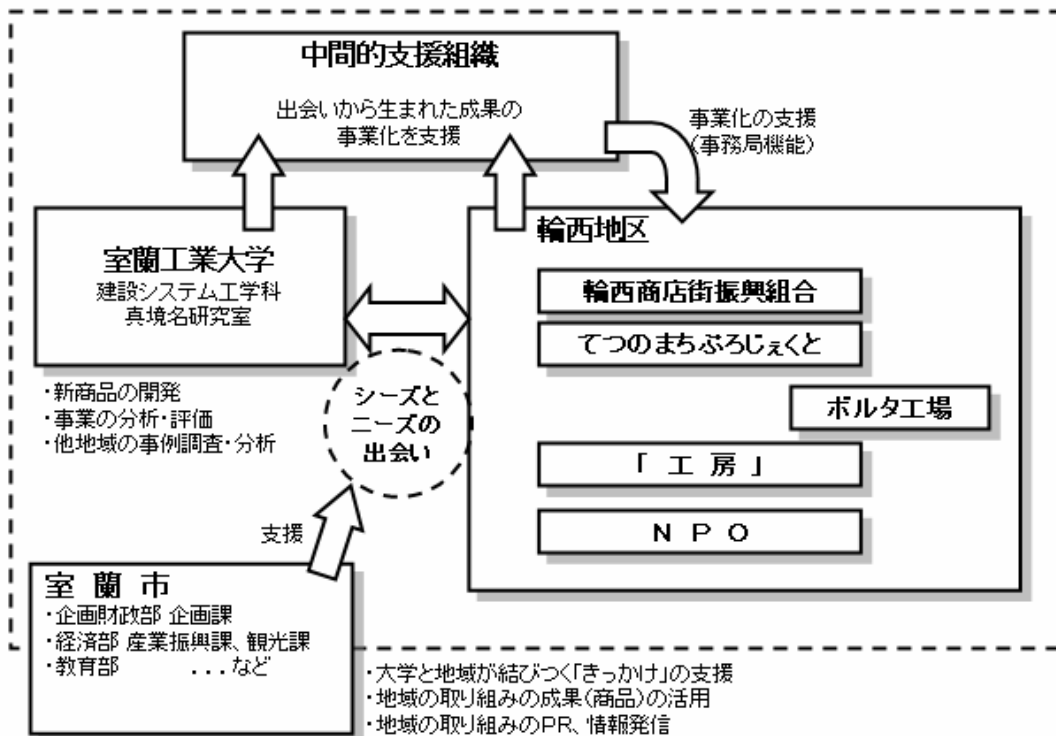
また、「ポルタ」というローカル商品がここまで注目を集めることができたことは、メンバーの中に報道関係者や広告代理店が入っていたことにより、効果的な情報発信や販路拡大が行われてきたためである。

一方、ポルタの開発が、製作・販売、販路拡大、そして「工房」の計画など、計画的に継続されてきたことは、大学による地域資源を活かした他都市の取組の事例調査や分析があったからと思われる。

地域雇用創出に向けた地域と大学との連携のプレイヤー

今回の調査では、イベント実施を通じて、多様な人材が参加していたことが、その後の「ボルタ」の開発販売、「工房」計画につながっている。

地域の取組を事業化（雇用創出）につなげていくためには、様々な実施主体を通じて事業を实践する「地域」と、新しいアイデアや取組を調査分析する「大学」のほかに、地域の個々の活動の事業実施を支援する事務局的な役割（人材）が必要と考えられる。



	プレイヤー	役割
学	室蘭工業大学 建設システム工学科 真境名研究室	<ul style="list-style-type: none"> <li>新たな地域商品の開発、アイデア</li> <li>地域での取り組みの課題整理、評価・分析</li> <li>他の地域の事例調査、分析</li> </ul>
産・民	輪西商店街振興組合	<ul style="list-style-type: none"> <li>「てつぷろ」や「工房」の商品・作品の活用</li> <li>イベントや体験事業等への参加・協力</li> </ul>
	てつのもちふるじえくと	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域商品の開発・生産、販路の拡大(雇用の創出)</li> <li>イベントや体験事業等の企画・実施(販売の創出)</li> </ul>
	「工房」	<ul style="list-style-type: none"> <li>作家による創作活動を通じての作品製作、商品開発</li> <li>工房を使った「ものづくり体験教室」などの開催</li> </ul>
	N P O	<ul style="list-style-type: none"> <li>イベントや体験事業等への協力</li> </ul>
官	室蘭市	<ul style="list-style-type: none"> <li>活動の立ち上げの支援</li> <li>地域の取り組みによる成果(商品等)の活用</li> <li>地域の取り組みのPR、情報発信</li> </ul>
	中間支援組織	<ul style="list-style-type: none"> <li>大学のシーズと地域のニーズをマッチングさせる機会、場の提供</li> <li>地域の取り組みの支援(窓口、事務局的な機能の支援)</li> </ul>

## 地域の知の拠点再生による地域活性化のシステムの検討

### ア) 大学等の諸研究と地域活性化に向けたテーマとを結びつけるキーパーソン

大学に蓄積された研究シーズと、地域活性化のためのニーズについては、最初から一致している場合は少なく、様々な地域の取組から大学のシーズを活かすためのニーズを探り出す「場」や「機会」が重要である。

「てつのまちぶろじえくと」の取組では、「アイアンフェスタ」が大学のシーズと地域のニーズの出会いの場となり、ボルタの開発、販路の拡大、そして「工房」の計画が生まれている。

しかし、「アイアンフェスタ」は当初から出会いの場として企画されたものではなく、イベント実施のため多彩な人材が集まり、結果として出会いの場となったものである。

大学と地域を結びつけるキーパーソンは、最初から存在するものではなく、大学と地域とが共通の目的を達成する取組の過程で生まれるものである。

### イ) 大学等の研究・技術・人材の活用方策を検討する地域で活動する諸団体

今回のケーススタディ調査においては、「てつのまちぶろじえくと」と室蘭工業大学との連携を中心に、地域の商店街や行政が参加、連携して取組んでいるが、当初から地域と大学との連携があったわけではなく、「鉄」を活かしたまちづくり、という共通の取組の中から、地域のニーズと大学のシーズとの連携が生まれてきた。

大学の知を活用する地域の団体は、大学が地域の活動に参加し、相互の信頼を深める中で生み出される。

### ウ) 地域の知の拠点活用による地域雇用創出を支援する組織（中間的支援組織）

それぞれの地域において、地域資源（今回のケーススタディ調査では「鉄」）を活かした地域活性化の構想や個々の取組は多くあるが、構想実現のための事業（段階）の計画や手法、事業の評価分析は少ない。一方、大学には、様々な地域の取組の事例や調査・分析、アイデアが蓄積されているが、研究成果をそのまま地域に活かす・実践することは難しい。

そのため、多様な人材が集う中で、シーズとニーズを探り合える、マッチングできる「場」や「機会」が必要であり、生み出された成果を雇用として創出する仕組みが必要である。

また、地域においては様々な地域の活性化のための構想・計画はあるが、人材不足のため実現に至っていないものも多く、出会いにより育まれた成果を展開し、地域における個々の取組を有機的に結びつけながら、実行につなげることのできる事務局的な機能を担う、中間的支援組織が必要である。

### エ) 地域の知の拠点活用による地域雇用創出に向けての行政の役割

大学の「知」が地域の取組に結びつくために、地域のニーズと大学のシーズをマッチングさせることが必要であるが、この「場」や「機会」の立ち上げにあたっては、行政の支援も必要となる。



また、取組から生まれた成果を積極的に活用するとともに、行政の施策などとも連動させながら、積極的なPR、情報発信することが必要である。

#### オ) その他

今回のケーススタディ調査においては、ボルタの生み出された経過を事例としながら、地域の活性化や雇用創出に向けた、大学と地域の連携の仕組みについて検証し、新たな事業展開に向けたニーズの調査と課題の検討を行った。

大学は、研究、アイデア、人材を有する知の拠点であるが、こうした大学のシーズを活かすためには、大学が地域に入り込み、様々な活動を展開する団体、人々と出会いながら地域のニーズを発見し、現場のニーズに合わせたシーズの展開を図ることが必要である。

大学の「知」と地域の出会いの場は、あらかじめ設定されたものではなく、大学が地域の活動に積極的に参加し、相互の信頼関係を築くことにより構築される。

「てつのまちぷろじえくと」を出会いの場とし、まちづくりからボルト人形開発へのシーズの展開、地域における雇用の創出を図った真境名研究室の取組は、大学に求められる地域との連携を実践した事例であり、こうした連携が広く展開されることにより、空洞化が進む商店街に新たな機能が付加され、まちなかの賑わい創出につながるものと期待される。

また、事業の継続においては、大学の知恵を活かしながら、事業の分析と評価を行い、新たな展開に向けたニーズの発掘を行うことも必要である。

今回の調査においては、アイアンフェスタや登別・カルルス温泉宿泊者を対象とした体験教室のニーズ調査や、モデル工房における創作活動の検証を行ったが、これら事業の展開においては、事務局機能をはじめとした組織体制の充実と、関係団体との連携の強化、地域としての受け入れ体制づくりが必要である。

地域で活動する様々な団体や個人が集まった「てつのまちぷろじえくと」は、地域と知の出会いの場を提供し、新たなシーズの展開において大きな役割を果たしたが、今後は、生み出された成果を事業として確立するための中間組織が必要である。

組織の形態としては、商店街振興組合やNPO法人など既に地域にある法人との連携や、「てつのまちぷろじえくと」の法人化、まちづくり会社などの新たな法人の設立などが考えられるが、地域住民と団体の参加と理解を得ながら組織の検討を進め、地域において事業を支援する仕組みづくりを行うことにより、“「鉄のまち」のまちなか再生”が実現できるとものと確信している。